神の姿に似せて造られた人間性とキリスト教

2023/5/10
佐々木正明

筆者は、いわゆる牧師とか宣教師とか言われる働きに就いて、すでに57年を過ぎました。その間、人間は、神の姿に似せて造られたと記されている(創1:27)、聖書の教えについての説教や、教えに接したことは一度もありません。たくさんの牧師や宣教師たちにも尋ねてみましたが、みな一様に「聴いたことがないし、読んだこともない。自分が説教したこともない」ということでした。どうやらこのことに気づいて大切な教えだとして取り扱い、説教しまた教えているのは、私だけだと思ってしまうほどです。私はここ30年ほど、この問題について一人で考え、学びまた教え、最近5～6年は随分説教もしてきました。まさにキリスト教の大失敗は、人間が神に似せて造られた存在であり、本来美しいものであると理解せず、無視してきたばかりか、人間は罪深いものであるという一面だけを、極端に強調して来たことにあると考えるのです。（試しに、チャットGPT に同様のこと尋ねてみました。答えは、キリスト教の文献に、そのようなことを論じたものを、見つけることが出来ないということでした。）

最近私は、世界で最悪の宗教はキリスト教だと、公言してきました。その悪の酷さ、悪の範囲の広さ、根深さ、時代の長さ、世界的広がりの大きさを、歴史的に考察しても、キリスト教の犯した悪に並ぶものはありません。私たちはその事実を謙虚に認め、それに対して正しい対応をしていかなければなりません。

キリスト教という宗教は紀元30年ころに出現した、イエスというユダヤ人が、キリスト(救い主)と認められ、崇められ、信頼され、礼拝され始めたところから始まります。ただしキリスト教は、ユダヤ教というユダヤ人独特の宗教から発展したもので、ユダヤ教の始まりはさらに1300年ほども遡ります。それはユダヤ教もキリスト教も聖典としている、旧約聖書に記されています。

旧約聖書に記されている神の姿は、不注意な読み方をすると、厳しく恐ろしい神となりますが、かなり熱心に学んでいたユダヤ教の指導者たちも、同じような感覚を持っていたようです。しかし実際は、とても優しく憐れみに富む神でした。それを明らかにしたのが、イエス・キリストでした。キリストが教えられた神は、厳しさを持ちながらも徹底した優しさの神、憐れみの神、赦しの神、罪人を喜んで受け入れる神でした。キリストは旧約聖書の一節を引用して、「神が喜ばれるのは犠牲ではなく、憐れみである」とお教えになりましたが、神がお求めになるのは宗教的厳格さ(犠牲)ではなく、憐れみ、優しさ(人間的感情)であるという意味です。

しかしキリスト教の骨子となったのは、キリストが地上で残された天真爛漫な教えではなく、パウロを始めとした使徒たちの残した手紙や文書でした。キリストが残された教えも、キリストが直接残されたものではなく、

キリストがお語りになった教えが、断片的に書き記され、広範囲に散らばっていたものを、随分後になって、当時のクリスチャンたちが苦労して収集し、編纂して残したものです。すでにキリストがお用いになっていたアラム語という、かなりなまりの激しいヘブル語から、より多くの人に読まれるように、当時の世界の共通語になっていた、ギリシヤ語に翻訳されていたのです。

この過程において、キリスト教の神の概念は、間違いに陥ったとは言えないとしても、かなりユダヤ教の人々が持っていた神概念に近いものが、より強調されることになってしまいまいした。つまり、優しい神よりも厳しい神です。また、キリスト教独自の経典である新約聖書でさえも、不注意に読んでしまうと、著者たちの意図に反して、優しい神の姿よりも厳しい神の姿が、突出するように見えるのです。たしかに、キリストの言行録である4っつの福音書と、使徒の働きのはじめの部分に記されている、キリストの神観、すなわち、「父なる神」という教えが、すっぽりと、完全に置き去りにされているのです。

キリストはそれまで誰も語ってこなかった、「父なる神」という言葉を用いて、厳しい怒りの神という旧約聖書から導き出された神観の、間違いを直そうとされたのです。「父なる神」は、旧約聖書の教えの継続ではなく、まったくキリスト独自の新しい表現で、いわばキリストの専売特許だったのです。たしかに、旧約聖書のイザヤ書には、神をイスラエル民族の父とする表現が一度だけありますが、（イザヤ64：8） キリストが教えた、一人の人間の父親としての神という視点は全く欠けています。例えば、キリストの12人の使徒の内、もっとも長生きをしたヨハネは、愛の使徒と呼ばれるほど、愛を強調した人物でした。ところが、彼の愛の教えを読むと、必ずキリストの十字架が背後に隠されているために、人間の罪に猛り狂い、恐ろしい刑罰を与えないでは居れなかった、厳しい神の姿が浮かび上がってしまうのです

それは新約聖書の大部分を書いた使徒パウロが、ユダヤ教の中でも厳格な神の律法を強調する、パリサイ派の中という環境で教育を受け、中でもでも突出した人物であったためと考えられます。パウロは神様からの啓示を受けて聖書を書きましたが、その啓示を理解し解釈したのは、徹底的にパリサイ派的な宗教観を持っていた、パウロという人物の立場からであり、そのような感覚で聖書を書いたのです。パウロが書き残したものは素晴らしく、そこに間違いはありませんが、神様の厳格さ、厳しさ、罪に対する激しい怒り、そして人間の罪に対する妥協のない裁きなどが、神様の優しさ、人間の弱さに対する配慮、赦し等よりも、強く表に出てしまっていると思われるのです。そうしなければ、人間の罪の重さ、大きさが理解されなかったためです。

パウロ自身は口を極めて、神様の優しさを語り、「アバ。父よ」と言う、当時の幼児語さえ持ちだして（ガラテヤ4：6）、キリストがお教えになった「父なる神」の真意を、一所懸命に説明しようとしています。幼子と父親との絶対の信頼関係、豊かな心の繋がりを持ち出して、「父なる神」の真の意味を伝えようとしているのです。キリストは一人一人の個人に対する、優しい父親を強調し、パウロはその上に幼児語の父親を被せて、さらにその意味を強調したのです。でもそれだけでは、旧訳聖書の恐ろしい神のイメージを変えるのは、困難なことだったのです。とは言えパウロは、さすがに神の救済のお歴史の転換期に、神が出現させた大人物でした。それは彼が、ユダヤ人と異邦人の区別を、初めて明解に論じた人物であり、異邦人とイスラ

エルに対する、神の公平な裁きについても語っているからです。（ロマ書2：12～15） 私のエッセイの大部分は、この彼の残した記述と、創世記1：27の記述の理解の上に立つものです。

パウロなどの時代が過ぎると、クリスチャンとなる人の数が、激しい迫害にも拘わらず、爆発的に増えて行きました。ところがこの時から始めて、およそ1500年間にわたって、キリスト教はとても困難な実情に取り囲まれて行きました。それは印刷技術がなかったため、聖書、すなわちキリスト誕生前からユダヤ教の聖典とされていて、キリスト教にも聖典と認められた旧約聖書も、キリストの昇天後に書かれた新約聖書も、爆発的に増加し続けるクリスチャンの数に対して、圧倒的に少なかったということです。また当時の書物というのは、おもに羊皮紙であったためにとても重く高価で、持ち運びが不便であったことから、実際に手に取り、読むことが出来る人はとても少なかったのです。使徒パウロでさえ、実際に聖書を持って歩くことは稀で、会堂に大切に保存されていた聖書を用いていたのです。．．．ましてや、新約聖書が今の様に27巻の書物に編纂されたのは、会堂というユダヤ教の施設自体がなくなってしまった、5世紀に至ってからのことでした。そのため、印刷機が発明され聖書が印刷されるまでのおよそ1500年間は、よほどの高い位の聖職者か、修道院生活をする僧たち以外は、聖書を目にすることはできなかったのです。

ということは、それまでに発展したキリスト教は、聖書を手にすることも学ぶ事も出来なかったままに、巨大化したということです。その間、キリスト教は様々な神学を整え、権力を手にし、富をほしいままにして行きました。キリストの教え、聖書の教えに従順に従った人たちが、教会の指導者になることはまれになり、世俗の富、権力、武力を持った者たちが高位の聖職者になって行きました。彼らの力はどんどん大きくなり、とうとうローマ帝国の皇帝さえ、彼らに従わなければならなくなった、そんな時代があったほどです。ローマ教皇（当時のキリスト教の頂点にいた権力者）の怒りを買ったローマ皇帝（ローマ帝国の最高権力者）が、雨の中、何日間も赦しを乞うて外に立ち尽くしたなどという、笑い話にもならないことがあったりもしました。

ですから、この期間に定められた教会の規則、教え、伝統などはほとんど聖書の教えとは無関係だったのです。今でもキリスト教の基礎的な教えであるとされている神学も、ほとんどはギリシヤ哲学の思弁的伝統によって考察され、構築されたものであって、聖書の教えとは関係がないのです。例えば、キリスト教の教理の中でも最も大切と言われている、三位一体説ですが、4世紀に大論争となり、多くの人たちが異端として追放され、教会は分裂してしまいましたが、今の私の思考からすると、まったく馬鹿々々しいにも程がある騒ぎです。確かに父なる神は神であり、子なるイエス・キリストも間違いなく神です。また聖霊も特に新約聖書の記述を読むと、間違いなく神であり、あたかも3者がみな神であり、この3者が一体であり・・・・・・・・・とまあ、果てしなく議論は続くわけです。今の私、牧師にとって、このような議論をすることこそ、議論好き、論争好きのギリシヤ哲学の傾向であり、聖書とはかけ離れたものなのです。

天地の創造者であり、永遠の存在者であり、無限の存在者であり、全知全能であるお方を、こんな小さな人間の頭で、その存在がどうのこうのと論じること自体が不敬であり、身の程知らずであり、馬鹿々々しいことなのです。牧師は父なる神も子なる神も聖霊なる神も、同じ唯一絶対の神であるとは信じています。だからと言って三位一体説は信じていません。大体無限の神、この広い宇宙の沢山の次元を超えて存在な

さる神を、3という数字で表すとは何事かです。数字は有限の人間の感覚に過ぎません。私たちの神は、その数字の概念に閉じ込められる神ではないのです。言い方を変えると、人間の救いのために、人間の救いを目的に書かれた聖書には、救いに関わりのないことは、記されていないのです。

ですから単細胞動物についても、三葉虫についてもアンモナイトについても、恐竜時代についても、ピテカントロプスについても、真偽はべつとして、最近の遺伝子研究によって、ホモ・サピエンスとの雑婚について話題になっている、ネアンデルタール人のことも、聖書の中には一切触れられていないのです。これらはみな、この小さく狭い地球上のことです。ましてや限界を説明するのが困難なほど広い宇宙の必要について、あるいはその状態についてなど記されていないのです。ですから神の本質について論じるならば、例え十位一体でも、百位一体でも否定することができないのです。

同じように、5世紀の大神学者と言われるアウグスチヌスが唱えたらしい、原罪も、今から考えると馬鹿々々しくて話になりません。聖書の教えではないのです。彼は神の国という大著を表したほか、多くの神学的貢献をしており、かなり聖書を読むことが出来た立場にいたと考えられますが、原罪の論理などは、聖書の教えとはかけ離れたものです。さらにこのころの教会はいわゆる暗黒時代に入り、まさに真っ暗闇です。暗黒時代はプロテスタント運動が興り、印刷機が発明され、大量の聖書が出版される 1500 年代まで、1000 年ほども続きます。その間に教会が定めた様々なことを、思いつくままに記してみましょう。思い付きですので、年代順ではありません。

まずカトリック教会は、ある程度聖書の権威を認めましたが、聖書を書いたのは教会なのであるから、教会の方が聖書よりも高い権威を持つと主張し、教会の頂点に立つ教皇の権威を高め、とうとう、キリストの代理者という立場を取得したのです。教皇がその座から語ることは、キリストが語ったことと同じ絶対的権威を持つと主張し始めました。このようにしてカトリック教会は、聖書の権威を実質的に無にしてしまいました。はっきりしていることは、聖書は彼らが言う教会、すなわちカトリック教会によって書かれたのではなく、カトリック教会が誕生する前に書かれていたのですから、議論になりません。なお教会で、聖書の権威が高々と掲げられるようになったのは、プロテスタント運動の功績です。

聖職者と呼ばれる人たちの、ヒエラルキーの導入自体も、キリストの教えとはかなりかけ離れた、人為的政治手段だったはずですが、教会はそのような制度を持ち込み、厳格に極めて厳格に適用しました。いわゆる平信徒と聖職者の決定的格差を作ってしまったのも、その悪しき模範の良い例です。そのような教会の制度の厳格さは、教会の固い伝統となり、教会の堕落の大きな要因の一つとなりました。それは、プロテスタントの聖書理解にまで影響を及ぼし、聖書の翻訳まで、捻じ曲げてしまっています。

例えば現代のどこの国のどのどの聖書をとっても、使徒パウロは「使徒として召された」と受け取られる翻訳になっていますが（厳密にいうと、筆者はその点を調べたことはないのですが）、これは聖職者のヒエラルキーを擁護するための明らかで、意図的な誤訳です。同じ召しという言葉が、同じパラグラフの中で、ロー

マにいたすべての信徒に対して用いられているのですから。（ロマ書1：1～7，Ｉコリント1：1～2） またこの翻訳では、同じパウロが書いたⅡテモテ1：9～12の教えと、調和しないからです。

また聖母マリヤの神格化もカトリック教会の犯した罪です。キリストの母親のマリヤは、罪無しとされただけでなく、あらゆる意味においてキリストと共に働いたと、格上げされました。贖いの働きも、取りなしの働きも、再臨以外は、おおよそ思いつくすべての働きを、キリストと共に行っていることになっています。ですからカトリック教会では、マリヤを「神の母」として礼拝さえできるのです。マリヤが無原罪とされたのですから、当然マリヤの母も罪無しにマリヤを宿したとされました。これを無原罪懐胎といいます。マリヤが罪を引き継がないでキリストを宿したという意味ではありません。しかもそのような議論が延々と続くのです。そのような人間の理屈を真面目に続けると、最初の女で、人類の罪の始まりとなったエバまでも、罪無しとされてしまいます。

偶像の持ち込み問題もあります。カトリック教会ではキリストの像、マリヤの像、時には父なる神の像、天使たちの像、あるいは聖徒たちの像、あるいは絵画などを持ち込み、偶像として拝んでいます。これは依代の範疇を超えています。（依り代については筆者の別のエッセイ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」をお読みください。） これは教会が犯してはならない、重大な罪です。

人種差別も同じです。聖書には、人種差別につながる教えも記述もありません。しかしカトリック教会では明らかな人種差別、あるいは異教徒差別を持ち込みました。十字軍などはその顕著な例です。人種差別がより具体化すると、植民地政策に及びます。15世紀に入りポルトガルがカトリックの強国になると、教皇は異教徒の救済と文明化を名目に、有色人種に対する宣教と支配を許し、植民地政策を推し進めさせました。これはすぐに同じカトリックの強国のスペインにも及び、さらにフランスやベルギーなどにも及んでいます。

またカトリック教会は、聖書にはない天国・煉獄・地獄という概念を作り上げました。これも聖書がなかったことの結果ではありますが、2世紀の末には、すでにその芽生えがあったと思われます。それが徐々に広まり、遂に15世紀になって教会はそれを正式に教会の基本的教えとしたのです。聖書には天国と地獄の教えはあります。（正確には天国と地獄という言葉は翻訳された日本語で、本来の意味が正しく伝えられていないのですが、説明をすると長くなりますので、ここでは天国と地獄にしておきます。） しかし煉獄という概念は全くありません。煉獄というのは、天国に行けるほど功徳を積んでいないけれども、地獄に落ちるほど悪に染まってもいない人が、天国に行ける程に功徳を積むまで、苦しめられる場所とされています。

カトリック教会ではそのような場所を想定することによって、救われて天国に行けなかった人の親近者たちが、いくらか慰められて、しかも、やがて天国に行ける望みを与えることが出来る、都合のいい場所としたのです。これは教会の金集めに非常に都合の良い教えにもなりました。信徒たちに、「煉獄で苦しみ続けているあなたの、お母さんお父さん、妻、夫、子供、お婆ちゃんお爺ちゃんが、今あなたがこの献金箱に献金

すれば、チャリンという音と共に、天国に行けるのですよ」と、語りかけることが出来たのです。それが、直接的には、ルターによるプロテスタント運動のきっかけとなったのです。

ですから、イエズス会のザビエルが日本に来て、先祖を大切にする日本人に、あなた達が早く来なかったために、キリストを知らないで死んだ先祖までも、悪人として地獄に落とす神は、愛の神ではないではないかと責められたという話とは、少々矛盾します。イエズス会がルターの学びをして、カトリック教会を破門されるのではなく、あくまでもカトリック教会に留まって、教会を浄化しようと考えたことが、煉獄の否定につながったと考えるならば面白いのですが、どうやらそのようなこともなかった様子ですから。ただ、もしもイエズス会の宣教師たちが、ロマ書2：12～15に記されているパウロの教えを理解していたら、日本人の質問にも、たやすく答えることが出来たはずです。

カトリック教会は、他にも多くの間違いを犯して来ましたが、聖書の教えを大切にしなかった、またできなかったという実情があるのです。気の毒と言えば気の毒ですが、人間の欲望をむき出しにし、最大限にしたと言えるでしょう。教会は神の名をもって人間を踏みにじり、自分たちの権威と富の欲望達成のために、力を尽くしたのです。カトリックの性質を、そのまま引き継いだ部分が多いプロテスタントの宣教も、3つの G が宣教の動機となったと言われています。すなわち Gold, Glory。3つ目はなんでしたか？　最近の筆者は80も超え、物忘れが激しくて・・・・・。そうそう Gospel ですよね。Girls では氷点をパロディ化した笑点にも、バカにされますよね。でも Girls は陰の動機だったのは本当で、4つの G だったら、入っていたことでしょうね。でもこれは、世界宣教が何世紀も遅れた、すなわちキリストの命令をすっぽかしにしていた、カルビン主義的なキリスト教だった、プロテスタントの宣教師にとってはとんでもないとことで、お叱りをうけることでしょう。彼らの多くはビクトリア時代の、キツキツのイギリスの倫理を振りかざしていましたからね。

カトリック教会の悪の独壇場は、ルターの抗議（プロテスト）によって、終わりを告げました。悪が終わりを告げたのではなく、独壇場が終わりを告げただけであって、悪の大部分は、プロテスタントにも、しっかりと引き継がれたのです。先に、一つの例として聖職者のヒエラルキー問題を上げたとおりです。プロテスタント運動はルターに始まり、カルビン、ツイングリ、あるいはツイングリから発祥した、アナバプテストの人たちによって広められました。それから少し後に、イギリスの国王がカトリックから離れて、イギリス国教会を建てたことにより、そこにプロテスタントの教えが入り込む余地が出来、プロテスタント運動の一つの力になったりもしました。このイギリス国教会、日本では聖公会と呼ばれたりしていますが、立教大学や聖ルカ病院がそれに属するものです。日本に来てまで、イギリス国教会はないですよね。

ただしこのイギリス国教会には非常に面白い話がついて回ります。イギリスを治めていたヘンリー八世は、ルターのプロテスタント運動に反対して論文を書き、教皇からいたく褒められて、「信仰の擁護者」というありがたい称号をいただいたのですが、自分の古びた奥さんを何とか離婚して、ぴちぴちギャルと結婚したいと望んでいました。それで、離婚の許可を教皇に願い出たのですが、教皇はこれを許さなかったのです。それに憤ったイギリス王はカトリック教会を飛び出して、自分の国の教会、イギリス国教会を設立し、自分はその頂点に治まったのです。そして目出たく離婚を果たし、新しい妻を迎えることが出来ました。ヘンリー八世

の最初の妻は、彼の死んだ兄の妻であったこと、また彼女との間に、後継者となる男子が生まれなかったという、同情すべき点もありましたが、いささか自分勝手で行き過ぎです。ヘンリー八世はすぐにその新しい妻にも飽きて、彼女に貫通の罪を着せ、反逆罪で処刑してしまいました。こうして彼は次々と結婚を繰り返し、６人の女性を妻にし、その内の二人を姦通罪で死刑にしています。「なんともはや」と言うところですが、神様はこんな酷いところにも・・・・随分醜い紆余曲折を経て・・・・素晴らしい結果ももたらしても下さいました。

イギリス国教会はカトリックから離れたために、より自由に、プロテスタント教会の考え方に接し、それを受け入れることができることになりました。そのためしばらく後には、プロテスタント教会の最も強い支持基盤ともなったのです。ただし、もともとカトリック教会の教義に反対したのではないため、今でもイギリス国教会には、カトリックに近い「高教会」とプロテスタントに近い「低教会」があります。この一つの教会の中の二つの流れの争いは、政治闘争とも重なり、血で血を洗う戦いになり、幽閉されて死を迎えた人たちの幽霊が、ロンドン塔に・・・・などと、まことしやかにささやかれるほどになったのです。カトリックとプロテスタント争いでは、フランスのユグノーの話も有名です。現代の私たちからすると、この出来事も、あまりにも惨たらしく、聞くに堪えないものですが、ヨーロッパのキリスト教の醜さを知る、良い学びになりますので、ググってみてお調べください。日本にも残虐な話には事欠きませんが、その残忍性、非人道性を比べると、ヨーロッパのキリスト教国のそれには、とても、とても、及ばないものです。

さて、ルターに始まる宗教改革は、ある意味では、ルネッサンス運動の教会版ともいえるところがあります。ルネサンスは、古代ギリシヤの人道主義に戻れと言うのが合言葉のようになりましたが、宗教改革も、古代ギリシヤの人道主義にもどって、自分たちの宗教を見なおすというところがありました。人本主義、人道主義、博愛主義的なところ、本質的な人間性を大切にする傾向が、教会の中にも起こって来たのです。ルターが、煉獄の教えを盾に金品を巻き上げ、聖ペテロ大寺院の不足していた建築費の穴埋めをしようとした試みに、激しく楯突いたのも、聖書の教えによってそうしたというよりも、神の姿に似せて造られた人間の一人として持っていた、彼の人間性が激しく「NO」と言ったと考えるべきです。ルネサンスの風は、より柔軟な物事の考え方をしていたプロテスタントに、受け入れられ易かったのです。

ただし、ルターやカルビンのような、カトリックの聖職者上がりの指導者は、あまり人道主義的ではありませんでした。ルターは自分を支持していた農民たちを裏切り、一説に 10 万を超える犠牲者を出したと言われていますし、カルビンは冷徹な迫害者となって、アナバプテストの人たちを、凍てついた川の上のつり橋から逆さに吊り下げて、それほど再び洗礼を行けたいのなら、自分が授けてやろうといって川の水に浸し、死にまでまで追い立てたということです。宗教的には単なる信徒に過ぎなかったアナバプテストの人々が、最も自由で、人間性を重んじ博愛的な考え方をしています。しかし、このアナバプテスト系の精神を引き継いだ、イギリスのっピューリタンと呼ばれたクリスチャンたちが迫害を逃れ、新天地アメリカに渡ると、優しく迎え入れてくれたアメリカ・インデアンを差別し、滅ぼし尽くしてしまうことになるのです。

ヨーロッパで迫害を受けたキリスト教の信徒の一団が、アメリカに入植したことにより、600 万人程もいたアメリカ・インデアンが、その無垢な優しさのゆえに、すべての持ち物を奪い取られ、滅びることになるのは、何という皮肉でしょう。無垢で優しく、入植者や隣の国の人を迎え入れることは、結局滅びを迎え入れることだというのは、その貨幣に「我らは神に信頼する」と刻んだ、アメリカという国の歴史を学ぶとよくわかります。その当時の国家間の付き合いと言うものは、そんなものだったのだろうと考えるほかはありません。でもまさに、嘘、騙し、隙があればねじ込むやり口です。

アメリカのメキシコを相手にした汚いだまし討ちは、現中国が新疆ウイグルの人々の住む土地を、自分たちの国土としてしまったのと、ほとんど変わらない手段を用いています。アメリカはそのようにしてテキサス州を始め、いくつもの南部の州をメキシコから奪い取りました。カリフォルニア州もスペインから奪い取りました。続いて平和な純情無垢のハワイを、汚いキリスト教の手段を用いて奪い取りました。ここには宣教師たちも、深く絡んでいたのです。今は多くの人々に親しまれているアロハ・オエという歌も、単なる美しい愛の歌ではありません。ハワ王国の最後の王リリウオカニ女王は、世界中で歌われているアロハ・オエという歌を、作詞作曲したことでも知られていますが、彼女は単純な愛の歌を作ったのではありません。滅ぼされゆく母国に涙して、作った歌でもあるのです。

ハワイを奪い取ったアメリカは、当時ハワイに移民していた日本人を、どういうわけか、日本人からすると訳もなく、敵視するようになりました。あるいはリリウオカニ女王の兄だった先代のカラカウア王が、アメリカのしたたかな脅威から逃れようと、日本の明治天皇の親王と、自らの皇室に属する姫との結婚を願い出たことによるのか、とにかく日本を敵視し出します。この日本敵視は、まず、アメリカ西海岸の人々の間で始まり、これをニューヨークタイムスという非常に影響力が強かった、大手メディアがセンセーショナルに取りあげた記事から、瞬く間にアメリカ中が日本を敵視しだします。

その内、日本に対する敵視は、ドイツに踊らされた「黄禍」、すなわち黄色人種の禍という言葉に絡められて、オレンジ・プランという官民を超えた敵対戦略として、広く根を張ることになりました。それが、ロシアとの戦いの勝利後の処理への介入、満州統治と傀儡政権の設立への介入、さらにハル・ノートに象徴される、真珠湾攻撃への誘引工作と続き、太平洋戦争への突入に至ります。キリスト教を旗印にしていたかのようなアメリカが、その実、非常に汚い手を使って諸国を騙し続け、日本をも騙し続けてきたことが、今やアメリカの極秘資料の開示によって、次々と明らかないなってきました。

日本では、アニメ「ドラゴンボール」の主人公の孫悟空が用いた究極の術、カメハメ波という想定でハワイのカメハメハ大王の存在は、多くの人たちに知られるようになりましたが、カメハメハ大王はリリウオカニ女王の３代前の王様でした。ドラゴンボールが世界中で大人気となり、日本のアニメ文化の理解、さらには多くの日本アニメに描かれている、日本文化への関心と理解を招くことにつながり、そこから日本文化の広い受容と理解と期待に、繋がったといわれています。本当にそうだったとしたら、まさに、鳥山明大先生にスタンディング・オベーション、拍手喝采ですが、どうも、日本人の自国賛美の「よいしょ」がたくさん混じっているような気がして・・・・・・ファクト、チェックでも

依頼しなければ・・・・・と脱線思考に流れて・・・・・脱線が重なって、元に戻れないことも多いのが筆者の欠点です。良くわかってはいるのです。本当の所。

太平洋戦争は、アメリカによって騙された日本が、真珠湾攻撃をしないでは居れないように、仕組まれたものであることは、筆者が1974年にフィリピンの神学校で学んでいたとき（正確に言うと、まだ建てられて間もない学校で、神学校に向けてカレッジ・レベルの教育を提供していた時。）、アメリカの歴史家であった宣教師から学びました。このことについては幾度もお話をして来たとおりです。しかし今や、もっともっと根深い恐ろしいアメリカが見えてきました。アメリカは19世紀の終わり頃から、すでに日本を敵国として認識し、これを滅ぼすこと、あるいは自分たちの属国とすることに、大きな努力を重ねてきたのです。それをオレンジ計画(War Plan Orange)と言います。アメリカは、ロシアとの戦いに勝利し、満州国を設立しようとする日本に、敵対して介入してきました。それでロシアに勝利した日本ではありましたが、勝利の実利は全くないままに終わってしまいました。アメリカは何としても太平洋を支配したかったのです。それは中国という国に対する思い入れがあったためです。

また、太平洋戦争の勃発に先んじて、すこし共産主義に寛容だったルーズベルト大統領は、ロシアのスターリンとひそかに結んで、戦争末期に至ってのロシアの参戦も想定し、さらに北海道の半分と、千島列島のロシア領化にも同意していました。そればかりか、そのために、ロシア軍の訓練にも手を貸し、アメリカの軍艦を筆頭に様々な武器を貸し出しさえしていたのです。それだけでなく、原爆の開発も前提に、広島や長崎だけではなく、20 ほどの都市に対す原爆投下も予め計画していました。戦争を早く終わらせるための無差別空襲と、原爆投下などという話ではなく、初めから有色人種である日本を徹底的に打ちのめす計画だったのです。日本は何とかして早く戦争を終結させたいと、さまざまな手段を講じてアメリカと交渉しようとしたのですが、アメリカはこれを拒み続け、多くの日本の都市に無差別の空襲を行い、数十万に及ぶ非戦闘員を殺戮し、その上、原爆まで落とすに至ったのです。

アメリカのこの計画は、戦後も変わりなく続けられました、GHQの支配も（War guilt Information Program）も、この計画の継続という一面がありました。正義に反する東京裁判も、日本の歴史の書き換えも、憲法の作成も、公職追放も、この計画に従って行われました。そして恐ろしいことに、日本を戦争犯罪の呵責の下に留めて、二度とアメリカに逆らえないようにしようというこの作戦は、見事に成功しました。

韓国の無謀な李承晩ラインにも、アメリカは目を瞑っていました。韓国の歴史の捏造と度重なる日本糾弾、さらには繰り返される賠償金の請求などにも、アメリカは無関心を装ってきました。しばらく前、ついにアメリカ政府は重い腰を上げ、韓国の慰安婦問題に関する調査委員会を立ち上げ、7年にわたって非常に大きな金を用いて調査を実施しました。その結果、韓国が申し立てる様な事実は一切証明されなかったという結論が出たのです。それにも拘わらず、アメリカ政府はこの結論を公にしていません。日本を恥の中に留め置く方が、アメリカにとって都合がいいのです。現在も、GHQ の WGIP は息をひそめて、生き続けているのです。

日本を愛する人々の中には、このようなやり方で、屈辱的にされた日本人の精神状態を立て直そうと、必死の努力を重ねている人たちがいます。その一つが、WGIP に従って行われた、日本の書籍狩り、焚書作戦で失われた書籍を探し出し、再出版しようという動きがあります。7700冊以上の、正確に言うと7769点に及ぶ、日本人の精神を鼓舞すると思われる書物が、焚書にされたのです。多分実際に焚書にするのは困難だったでしょう。でもとにかく処分されたのです。しかし、それほど大量の書籍を完全に処分することは、いかに GHQ の権力をもっても不可能でした。密に残されていた書籍が、押し入れの隅から、本棚の裏側から発見されて、いまや、かなりの数が続々と復刊されているのです。

しかし、アメリカの日本に対する敵対行為、日本をアメリカの下に閉じ込めておこうとする試みは、今も脈々と続いています。何とかして、日本の経済的成長を止め、アメリカの属国にしておこうという魂胆です。ニクソンショックもあれば、日米経済摩擦によるスーパー301 条の対象とされ、コンピュータ市場から締め出されたトロンもあります。自動車摩擦による、日本車締め出しもあれば、失敗に終わりましたが、国際的な CO2 問題を利用した EV をもって、日本を落とし込めようとした策略もありました。アメリカは日本を生かしておこうとして、今も同盟国であり、親密な関係を保っています。しかしあくまでも、日本を自国の支配の下に置いておきたいのです。かなり辛辣に書きましたが、まだまだ多くのことがあるのです。

このような策略を弄して止まないアメリカですが、一応キリスト教を土台としている国です。ただしそれはあくまでも、「キリスト教」を土台としているのであって、「聖書」を土台としているのではありません。カトリック教会からプロテスタント教会が飛び出したとき、プロテスタント教会はカトリック教会の権威、教皇の権威を否定し、代わりに聖書の権威を高揚しました。それがウイッテンベルグの印刷機の発明と時期が重なり、聖書の大量印刷が可能になり、より多くの人々が聖書を読めるようになったために、聖書の権威を高揚するプロテスタント教会は、力を増すことになったのです。

しかしプロテスタント諸教会も、聖書のあらゆる教えを再吟味したわけではありません。教会は、元来保守的で伝統的な組織です。自分たちを危うくするような改革には、尻込みをするのです。ですから出来るだけ、以前のままの姿を保ちたいのです。それで、自分たちに問題がないと思われる点、状況から察して変える必要がないと思われるところは、みな元のまま、すなわちカトリック教会が教えたままを引きついたのです。人種差別も、植民地政策も、奴隷政策もカトリックの時代と同じように引き継いでいました。カトリックのポルトガルやスペインが衰退した後、力を増したプロテスタントのオランダやイギリスは、もっと熱心にそれらの政策を継続しました。その結果、イギリスは世界中のいたる所に植民地をもち、太陽はイギリスの地を見ないで昇ることはないと言われるようになったのです。そしてその統治は、決してポルトガルやスペインのカトリック支配よりも、人道的であったなどと言えるものではありませんでした。それでもあくまでも一般的な言い方ですが、プロテスタント諸国の方がカトリック諸国よりも人道的であり、平和、人間の尊厳、他国との共存などの意識が進み、多くの面において開放的であるというのは事実のようです。

一方、日本は植民地制度を取り入れたことはありません。文字の上では植民地制度と言われる場合もありますが、本来の植民地制度と全く違うものであり、台湾や韓国は、正しく言えば植民地とされたのではなく、

併合されたのです。台湾や韓国の富を奪い、国民の人権を奪ったのではなく、貧しかった台湾や韓国のために、莫大な富を用いて様々なインフラを整え、学校を設立して教育を行き渡らせ、身分差別を撤廃し、国を豊かにしたのです。そのうえ住民たちには日本国籍があたえられ、基本的に日本人と同等の権利が賦与されて、欧米の植民地政策では考えられないほど、優遇されたのです。しかも日本は、併合による統治を終了させられたとき、そこに残したあらゆる財産を、そのまま譲渡して、決して支払いを求めませんでした。西欧諸国が植民地政策を辞めたときには、多くの支配国は、それ迄つぎ込んだ資金の回収を目論んだのです。そのために、植民地だった国の人々は、無教育と無資本の中に取り残されてしまったのです。日本はそのようなことを、台湾と韓国に行ったでしょうか？

　植民地政策を撤廃しようという国際条約制定の機運は、第一次世界大戦後に高まりましたが、完全な制定には至らず、ドイツなどが、植民地を奪われただけに終わってしまいました。植民地放棄が雪崩のように起こったのは、第二次世界大戦の後のことです。ところが日本は、第二次大戦前からそれを目指して、歩んでいました。まだまだ植民地政策が幅を利かせていた時代であり、日本が国際舞台に躍り出て、東南アジア諸国を統治し始めた当時のことですから、日本の意思がまっすぐには伝わらず、当然、懐疑的なアジア諸国もありました。しかし日本政府はアジアの代表者たちを東京に招き、大東亜会議を開催し（1942年）、日本は西欧諸国に植民地化されたアジアの解放を目指し、たとえ短期間は、自分たちで国を治めることを知らなかったアジア・太平洋諸国の人々を指導するために、支配することがあったとしても、必ず、近いうちに開放すという、侵略に見える日本軍の活動の底に流れる、本当の意図を説明したのです。

　ちなみに、インドネシアはプロテスタント国であるオランダに、最も過酷な植民地政策を採られ、長い間、人間らしい生活さえ奪い取られてきました。そこに日本軍が攻撃を加え、オランダ軍を追い払ってしまいました。ところが太平洋戦争が日本の敗北によって終わるとすぐに、オランダはまた兵力をもって、インドネシアを植民地にしようとして、戻って来たのです。これに対し、およそ1000人に近い日本の残留兵たちが、彼らの独立のために戦ったのです。それが、オランダを退かせることになったのです。このことに関して、オランダ政府は長い間、インドネシア政府による謝罪要求を無視してきました。そして、一人の日本兵によるオランダ人女性に対する性犯罪を取りあげ、日本を糾弾し続けて来ました。たしか、オランダの王室関係者か政府関係者だったかが、インドネシアに謝罪したのは、つい数年前のことだったと記憶しています。オランダ人たちのグループが原爆記念か何かの時に日本にやってくるたびに、私たちは日本人を赦しますと言っていましたが、日本人は、そのようない赦されなければならないことをしたのでしょうか？

　また日本は、インドの独立のために、大きな支援をしています。陸軍中野学校で訓練を受けた人たちが、独立を望んでイギリスと戦っていた、マハトマ・ガンジーたちを背後から助け続け、独立の大きな力になったのです。日本人は、全体的に言って、アジアの独立、すべての植民地国の解放を願っていたことは、間違いのない事実です。このように、他国の窮状を放っておけない、何とか助けたいという気持ちは、日本人の精神構造の特徴になっているのです。

日本は、植民地主義の欧米列強をアジアから追いだし、より自由で公平な国際関係を築き、同時に日本の天然資源の輸入の妨げをも、取り除こうと望んだわけです。それは有色人種で初めて白人国家のロシアに勝利したことから、有色人種国家から期待を向けられていたこともあって、幾つかの参加国の好意的理解も得られたようなのです。つまりアジア諸国の独立が、大東亜戦争の大きな目的だったのです。もちろん日本人の中にも、アジア諸国を植民地にしようとしていた輩たちも、そこここにいたことは自然でした。植民地化が、当時の世界の列強の考え方だったのですから、西欧列強に「追いつき追い越せ」の合言葉をもって、懸命の努力を重ねていた日本人には当然のことです。しかしそのような日本政府の理想論的な考えは、アメリカのオレンジ作戦によって、太平洋戦争という、まったく違う戦争に変えられてしまったのです。

日本が国際会議で人種差別撤廃の提案を行ったのは、1919 年のパリ講和会議においてのことでした。この時、15 の参加国のうち 9 か国がこの提案に賛同しました。このニュースに接したアメリカの黒人社会では、大きな期待と希望が広がったと言われています。しかし、議長国アメリカの大統領ウッドロウ・ウィルソンは、奴隷制度が厳しかった南部出身の人で、奴隷制度が撤廃された１８６５年以降であったにもかかわらず、人種差別的な思想を公然と表現しており、国内でも差別政策を擁護していた人物でした。パリの講話会議でも、形式上は全会一致が原則とされていたため、「過半数の賛成がありながらも、議長の裁定によってこの提案は却下されてしまった」と、言い切るのは正確ではありません。ただし、実際には多数決が用いられることも多かったことを考慮すると、ウイルソン大統領の意思が強く影響したというのは事実でしょう。

幸い、太平洋戦争の直後から、欧米諸国からの独立が相次いで起こりました。イギリス、オランダ、スペイン、ポルトガル、アメリカなどなどの国々からの独立が続き、イギリスは戦勝国にもかかわらず、その殖民地の多くを失い、最大の強国から転落して、普通の先進国の国の一つになってしまいました。

さてこのような歴史の背景には、何があったのでしょう。それは人文主義、あるいは人本主義の高揚です。あらゆる反人間的行いに NO という心が広がったのです。旧約聖書に見られるからと、奴隷制度を保持したり、戦争を美化したりする心よりも、あらゆる残虐な行為を悲しみ、憤る心が強くなってきたのです。特にプロテスタント教会が強い地域に、そのような傾向がはっきり現れました。それはしばしば、伝統的な正統的教会の、保守的で閉鎖的な態度に失望し、信徒たちが教会を離れる動きに繋がりました。それで西欧のプロテスタント教会の会堂が、物置化しているのです。教会を愛情に満ちた赦しと、共存と、平等と平和の共同体にして来たのは、西欧的なキリスト教の神学ではないのです。それは西欧のキリスト教が気づかないままに来た、神様の姿に似せて造られた、基本的人間性、本来的な人間性なのです。

そしてここが面白く、大切なところなのですが、聖書を知らない異邦人の日本人が、神に似せて造られた人間性、その美しくも愛すべき人間性を、最も気高く保ち続けていると考えられることです。神に似た人間性は、まず、神を感じ、神をあがめ、神を礼拝し、神を賛美することであり、神に喜ばれる生活をしたいと望むことです。ほとんどの日本人は聖書に教えられているような、全知全能の神、天地創造の神は知りません。知らないながらも、八百万の神々とは異なった、次元の違う、気高い存在がいらっしゃると、本能的に

感じています。そのような日本人の宗教心を代表するような歌を詠ったのが、西行法師という仏僧でした。彼は仏僧でしたが、まさに日本人だったのです。彼は天照大神を祀った伊勢神宮に詣でて、詠いました。「何事のおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる。」 どなた様がいらっしゃいますのかは存じ上げませんが、自分の過ぎ越し方を思い浮かべれば、ただただありがたく、涙がこぼれるばかりですと言うのです。これが日本人の宗教心の、最大公約数的表現かと思います。

また人間が神の姿に似せて造られたということは、人間同士が互いに善意をもって、他人の幸せに貢献しようと願いながら生きることです。これは日本が、四方を荒海で囲まれた列島国であり、外部からの敵の侵入も最小限に食い止められ、最も定着性の高い稲作文化を保ち続けることができた。そのような地政学的理由の中で育まれた意識が、日本の共同体意識であると断定するには、少々根拠が弱すぎるように思われます。ここに、日本人は神の姿に似せて造られた本性を、最も明確に表現できた民族だと考えると、よりつじつまが合うのです。隔離された列島の定着性文化と重ね合わされて、より強固な理論の組み立てになります。

人々の幸せをひたすら願っておられるのが、私たちの神、天地創造の神です。そして、その神の姿に似せて造られた本源的人の姿に従って生きようとするのが、人間本来の生き方です。それがとても美しく表現されたのが、聖徳太子の言葉と言われる、「和をもって貴しと為す」です。人間同士が互いに相手を思いやりながら、温かく平和に生きようと願うことこそ、大多数の日本人の願いです。この言葉の出所は、儒教や仏教に在ったようですが、聖徳太子の17条の憲法では、日本的な地域共同体の意識が、強く現れているように感じられます。

最近の AI,すなわち人工頭脳による大掛かりな研究では、日本の思いやりの文化、平和を望む共同体文化、言葉によらない空気を読む文化、議論によって到達する結論を待つのではなく、察する文化の重要性が指摘されたそうです。それはまさに、永遠の昔から、交わりの神であられた聖書の神に似せて造られた、人間性が強く現わされた文化と言えるでしょう。ただしこのような考え方で、日本のネット文化を賑わせている大半は、事実ではなく創作である可能性が非常に高いことも、理解しなくてはなりません。まるで、GHQ による、War Guilt Information program への報復のようなことが起こっているからです。

さらに人間が神の姿に似せて造られたということは、人間の自然に対する態度に現されます。神は自然を造り、それをとても大切にし、人間にその管理をお任せになりました。それは自然を支配するというような、キリスト教的感覚とは少しばかり違い、自然を大切にし、慈しみ、自分すら自然の一つと認識し、自然と共に生きることだと思います。自然と共に生きるのが日本人の姿です。(列島改造論などがもてはやされて、自然が壊されそうになった時もありましたが・・・。)日本人は西欧の人々に比べると、瞑想する、黙想することを大切にします。それは、自然を感じながら、その自然の一部である自分、神の姿に似せて造られた人間を、深く探り考える行為なのです。

日本人は神に似せて造られた姿、本来的な人間の姿、あるいは人間の本性、本能と言うものを、最も大切にして生きている民族だと感じるのです。それは日本人が、たとえヘブル語の神の名は知らずとも、日本語で日本人の感覚で、表現しているかもしれません。「目に見えず、手で触れられず、言葉で表現することもできない、気高いお方」かもしれませんし、「お天道様」かもしれません。あるいは口に出して言うのも恐れ多い方として、「お言わず様」かもしれません。（お言わず様は、宗像神社の神様の名） それらの表現には当然間違いも、不充分さもあることと思います。旧約聖書に記されている神様のお名前も、皆不十分なのです。ですから、沢山の呼び名があるのです。でも聖書は語ります。多くの名があっても神様はお一人なのですと。（ゼカリヤ14：9）

日本語で、聖書が教える神観に一番近いのは、いまのところ「お天道様」ではないかと、筆者は考えさせられるようになっています。日本語は「道」が付くものが沢山あります。柔道、剣道などの武芸から、茶道、花道、などなど、みな人の在り方を極めようとする、道に通じるのです。ですから道という字を用いている習い事には、殆ど神道の神棚が祀られていて、その前に心を整える習慣があります。イエス様は、「私は道であり、真理であり、命である」とおっしゃいました。自分こそが、罪ある人間が神の御許に行くことが出来る、唯一の道であることをお示しになった言葉で、その道を歩みなさいと言う、大切なお勧めです。道も真理も命も、基本的に同じことを言っているのです。神に通じる道なのです。お天道様はヘブル語もギリシヤ語も知らない日本人が、聖書の教える天地創造の神を、言い表したものではないかと……、今のうちは想像しているだけですが・・・・。想像することこそ、新しい創造につながる行為あり、神に似せて造られた動物として、最初から創造者から与えられた大切な能力です。自己弁護です。

また脱線をしてしまいましたが、元に戻って・・・・残虐無比なキリスト教を変えてきたのは、この、神様に似せて造られた人間の、本源的人間性です。人間としての本来の姿です。私たちはこれこそが全人類に共通して与えられたものであり、人間が人間として生きるための、文字によらない法則、法律、律法だと思います。旧約聖書の教えは、ユダヤ人が、神の救いを理解し、その実現のために用いられる人間になるための、指導書であり、教育書なのです。共に神に与えられたものでありながら、まったく違う性質のものです。しかしその本質においては共通性のあるものなのです。私たちは日本人のクリスチャンとして、神に似せて造られた本源的人間性を大切ににしながら、生きて参りましょう。

ではなぜ日本人が、このような特異な感覚を持っているのかということについて、考えてみましょう。それは日本人の神に対する感覚、あるいは神観というものに関わるのだと思います。日本は、全体的に見ると、パウロがロマ書1章18節以下で述べている、偶像礼拝の罪には、完全に陥ってしまったとは言い難いからです。本来の日本人の神感覚では、偶像を造らないのです。日本人の宗教意識の現れである神道では、神は見えない存在であり、手で触れることも、口で説明することもできない、気高く、清く、大きく、易しく、恵み深いお方です。神様が被造物を通してご自分を啓示してくださったことを、最も良く理解した一つの民族が、日本人だったと思われるのです。ですから、本来の神道には、少なくても神道の高貴な精神を保っている部分では、偶像の出る幕がない。入り込む余地がないのです。八百万の神々の世界は、聖書でいうならば、悪霊や汚れた霊や幽霊の世界、もろもろの霊の次元と同じであって、本来の神の世界ではないので

す。それで多くの日本人は、「神など存在しない」と断言して止まないのです。それでいながら、宗教の大切さ、宗教心の大切さを主張し、最も宗教心の篤い国民とさえ呼ばれているのです。神はいないという日本人の主張には、たしかに唯物論の影響もあるでしょう。しかし、八百万の神々の愚かさを、日本人は内心では恥じているのです。

こうして、不完全ではありながら、日本人は偶像礼拝を避けてきたのです。どこの神社を訪ねても、偶像はありません。神道で大切にされているのは、偶像ではなく依り代です。初日の出を拝むのも、太陽を神として拝んでいるのではなく、太陽をあらゆるものを生かすいのちの源、そして恵の源である見えない神の象徴として、その太陽の背後におられる、目に見えない大きな存在を礼拝しているのです。この依り代は聖書の中にもしばしばみられるものです。非常に偶像礼拝に近いものでありながら、偶像礼拝とは一線を画しているのです。たとえば、荒野であげられた青銅の蛇。たとえば、契約の箱、例えば幕屋とたくさんあります。

偶像礼拝を避けてきた日本は、神様からの刑罰、おのれの欲望に任せられるという刑罰を、他の偶像礼拝を積極的に行っている人々程には、受けていないと考えられるのです。だから、日本人の心には、あるいは日本の文化には、神の姿に似せて造られた、人間本来の人間性が色濃く、強く留まっているのです。それが、互いに愛し合い、和を求め、他者の幸せを願い、平和な共同体作ろうとするのです。もしも使徒パウロがこのような日本人の宗教意識、神意識を知っていたならば、ロマ書の記述も変わっていたかもしれませんね。

私はキリスト教が嫌いです。学ぶごとに、キリスト教という宗教の醜悪さに身震いします。しかし、私は聖書の教えには感動しています。キリストの教えにも体が震えるほど共感を覚えます。私は教会がイスラエル民族に取って代わったという、古いカトリック神学から引き継いできた教えを憎みます。（置換神学）。旧約聖書の律法までも、自分たちに与えられたと、とんでもない勘違いをし、自分たちの神を「万軍の主」、「戦いに猛き神」と理解し、戦争を正当化し、人を殺すことをなんとも思わない、教会を作り上げてきたからです。それは有色人種や植民地の人々への取り扱いだけではなく（南米の多くの国々は、移民した白人がかなりの数を〆ています。） 自国の犯罪者たち、魔女や捨教者と判断された者、教会の教えに従わなかった者に対する処罰は、惨たらしく、著しく人道に反するものでした。特にフランスのユグノーの取り扱いや、イギリス国教会の自分たちの信仰に合わない者たちとの抗争は、語るに忍びないものです。

私は聖書学校を卒業したとき、記念に神田の古本屋街に赴き、“A Cloud of the witness”と名付けられた古く汚れた本を安く買い、イギリスの宗教抗争で死んだ人たちの、死に際の美しい姿を読んで、心底から驚かされました。庄屋佐倉惣五郎の、「この恨み、七生たたらでおくべきか」という、辞世の言葉と比較して感動したのです。かなり厚いハード・カバーの本ではありましたが、辞書を片手に、1年以上かけて読み通したものです。筆者が初めて完読した英語の本でした。そのうちに死に際の証人たちの感動的な姿よりも、良くも同信の者たち、少なくても同じ神を忠実に信じている者たちに対して、このように惨たらしい殺し方をするものだと、そのキリスト教に憤りを覚えたのです。これが西欧のキリスト教に対する、私の最初の失望でした。そしてこの感動を蜂起させるような物語の多くの部分は、単なる創作にすぎないのだろうという、うが

った考えも出てきたのです。"Farewell、Farewell" と叫びながら、火あぶりの刑で死んでいく聖徒たちの姿に、最初の内はほんとうに 感動して、Farewell という、今ではあまり使われなくなってしまった、別れの言葉を覚えてしまいました。

では今晩はこのくらいで、私も Farewell. 直腸癌の手術を受け、同時に、肝臓にステージ4. つまり末期癌が見つかり、治療法は無いと診断され、余命1～3年と宣告され、やっと3年半生き続けてきた筆者には、今長く書き続ける力がありません。ましてや読者を増やそうと、英語の翻訳も進めている・・・・・・こういうと格好がいいですが・・・・・・チャット GPT の力を借りて・・・・・進めている自分には、書きたいことがあっても、もう追いつかないのです。またまた横道にずれ込んでしまいました。80歳も超えたんだから、ま、いいか。こんどこそ、"Farewell!"

さて、目覚めて、また戯言を書き続けます。自分では戯言ではないと断言できますが、読んでくださる方たちの大方は、戯言と言い切ってくださると、想像しながら書き続けます。しかし、「私は日本人だなー」と、つくづく思います。たとえ日本という住居の隅っこで、ごそごそとゴキブリのように生きて来た、小さな存在であっても、何か最近、外国のものを受け入れて、受け入れただけでは決して満足せず、必ず、それを改善改良し、多くの人たちに役立ててもらおうと努力してきたのが、日本人の特徴だからです。

それはほとんどあらゆる方面で発揮されて来た日本人の魂、職人気質(かたぎ)とでもいいましょうか。そのようなものです。例えばいま中国の若者たちが、自分たちの言葉でお喋りをしていると思っていたとしても、その内の70パアーセントほどは、日本で作られた、和製漢語なのです。漢字を輸入されたままには残しておかず、そこから色々な改善を重ね、ひらがなも、カタカナも作り出しました。そして、日本語を非常に豊かで使いやすい言葉にしたのです。それがさらに進んで、明治時代に西欧の様々な文明が輸入され、用いられていた日本語では対応できなくなったために、中国から渡って来た漢字を二つあるいは三つ組み合わせることによって、見事な日本語を作り上げたのです。漢字一字一字にはそれぞれの意味があるために、それらが組み合わされると、非常に豊かな言葉になるのです。たとえば、現在の中国の国名「中華人民共和国」をとっても、元々の中国語は、「中華」だけで、人民も共和国も、日本語なのです。

私は聖書を信じる日本人です。西欧キリスト教はとっくの昔に捨てましたが、私は聖書には絶対服従なのです。それで、西欧から輸入されたキリスト教が、せっかく良いものを持っていながら、非常に醜い宗教と成り下がっていると実感して、それを改革改善して、日本人だけではなく、世界の人々の役に立てたいと、壮大なことを願っているのです。

それと同時に、私には非常な恐怖があります。現在の西欧キリスト教、そしてその真似事にとどまったままの日本を含む、世界中のキリスト教は、やがて終焉を迎えることになるのではという、とてつもない恐怖です。神は罪に陥って悪魔の支配に下った人間を救おうと、イスラエル民族を選んで、旧約聖書を与え、かれらを教え導き、やがて救い主が生まれる国に相応しく育て、彼らをもって世界に救いをもたらす、祝福の民族にしようとなさったのです。しかし、残念ながら、イスラエル(後にユダヤと呼ぶのが一般的になった)

民族は、自分たちが選ばれたことに慢心してしまい、神から選ばれた目的、使命、ミッションを忘れ、使い物にならなくなってしまったのです。そこで神はユダヤ民族を、少なくても「長いひと時」の間、お見捨てになって、彼らにお与えになった使命を、他の人々にお委ねになったのです。それはキリストが幾度かお語りになった譬え話によって、明らかです。仕事を任せられたのに、任された仕事をほったらかしにしてしていた使用人を捨てて、その仕事を他の人たちに与えたという、あの譬え話です。

これは非常に唐突な、キリストのユダヤ民族切り捨ての宣告です。キリストの言葉以前には、そのようなことは囁かれたことさえありません。ところがキリストはそれを、まるで天雷のように、突然お語りになったのです。そして、キリストはユダヤ人に変わって、キリストの使命を遂行する、教会をお立てになったのです。キリストは「私の教会を建てる」と宣言され、これに世界宣教の使命を託されたのです。しかし今見てきたように、教会はキリストの使命を果たすことが出来ないまま、なぜできなかったのかということを真剣に考えることもなく、旧態依然として罪を犯し続けています。

私は悪夢に悩まされそうな気分です。キリストは、今度は教会に対して、突然雷を落とされるのではないかと、恐れるのです。そうです、突然です。使徒パウロは間違いなく大人物でした。彼は接ぎ木されたオリーブの枝を譬えに持ち出して、イスラエルと教会の関係を取りあげ、神が元々のオリーブの木を惜しまずに切り捨ててしまわれたのなら、それに接ぎ木された枝はなおのこと、捨て去られてしまうと語っています。パウロはこのオリーブの元木と枝との関係を、ロマ書の11章ほとんどを費やすほど、長々と語っています。パウロはただのレトリックとしてこれを語って、教会に緊張感を与えて、励まそうとしていたのでしょうか。そのようにも受け取れます。しかし私はむしろ、これはあり得ることとして語られたと、思うようになっているのです。アブラハムの召しからおよそ2000年も続いた、イスラエルの選びの歴史が、突然終わりをつげ、新しい教会の時代の幕開けとなったのです。

接ぎ木された枝である教会は、その使命を疎かに弄び続けたために、取り去られるかもしれないのです。キリストによって200年前に立てられ、建てられた教会も、使命遂行に失敗して捨てられてしまうかもしれないのです。では誰が新にその使命を負わされるのでしょう？　今のイスラエル民族が再びその使命を・・・・というのも、ほとんど考えられません。もしかしたら日本？！　そんなこともあり得ない話ではないかもしれません。でも私が、いくら日本人であることに喜びを感じていたとしても、そんな夢は見ないことにしましょう。しかし、神の姿に似せて造られた人間性を重んじ、神の本当の愛の姿を、もっともっと明らかに伝えることが出来る人たちが、起こされるに違いないと思うのです。80歳を過ぎた末期がんの患者が語っている、妄想に過ぎないでしょうか？